

## 近世後期町人文学の發生

神 保 五 彌

上方文壇の衰頹は、西鶴歿後完全に商品化された浮世草子八文字屋本が、作者の私底から増大する民衆の需要に  
応じきれないで、中世小説や浄るり、歌舞伎の翻案によって当面を糊塗し、質的に急激に低下していったことにし  
めされる。元祿以降の商業資本主義の行詰りや、相づく貨幣改鑄にともなう経済界の混乱によって、上方町人が急  
激に保守的になり、新しい文化を創造する熱意を失っていったことが原因である。

明和四年、約一世紀にわたって上方の浮世草子界をリードしていった八文字屋が、その板権を大坂の升屋にゆず  
ったとき、浮世草子の歴史は幕を閉ざすわけであるが、ちようど浮世草子が最後の余喘をたもっていた延享・宝暦  
のころ、浮世草子にかわる新しい花街文学が、漢学者の余技として上方に發生してきた。洒落本である。しかもそ  
れは上方では順調な成長をとげず、ほぼおなじ時期に、これも漢学者の余技として發生した江戸の洒落本のみが、  
江戸町人の手にうけつがれ、近世後期町人文学として成長していった。きわめて主知的なダンディズムと、バルナ  
シアン風な文人趣味にささえられた發生期の洒落本が、上方において成長せず、江戸においてのみ何ゆえに民衆の

手に移行し、江戸町人文学發生の萌芽となりえたか。おのずからここに、江戸町人の歴史、性格をふりかえってみなければならぬ。

## 二

家康によって開かれた江戸は、近世初頭においては未開の政治都市にすぎない。町人はいずれも他国からの移住者であった。江戸において大町人の名でよばれるものは、そうした江戸町人のなかで、いずれもいわゆる《江戸店もちの上方町人》である。彼らが政治都市江戸において、いちはやく幕府の御用町人として巨利を欲し、いまにしたことは改めていうまでもない。たとえば、元禄四年以来幕府の金融御用を勤めた本両替商の構成を、はるか時代の下った元文元年の御為替組について見ても、そのうち十人組は当年三名の缺員、七名のうち江戸に本店を有するものはわずかに二名、他の五名はいずれも伊勢松坂、伊勢射和住、泉州堺の本店からの出店であり、三井組の三名はいうまでもなく京都の本店からの出店であった。（岡替年代記）これら幕府御用の両替商は、すべて他に呉服屋その他を兼業した大町人である。彼らは幕府の要路にとりいって、これを利用し、これの支援のもとに江戸における商業の基礎をきずいたものである。西鶴が永代蔵に描く三井九郎右衛門の越後屋のごときも、その資金は大坂町奉行よりの借用になるものであった。（竹越氏・日本経済史）これに対し、江戸にのみ店をかまえる大多数の江戸町人は、武家という典型的な消費階級を顧客にもつ、小資本の小売商人にすぎない。

江戸の大町人と称せられるものほとんどが、すべて上方からの出店をまかせられている町人であれば、こうした出店の番頭・手代など、いずれも上方からくだって何年かの年季を江戸でつとめ、ふたたび上方の本店にかえっ

てゆく存在である。彼らに、江戸という特定の都市に対する愛情や執着が生まれようはずがない。当然、江戸町人固有の文学のうまれる余地はまったくなかった。近世前期においては、江戸はあくまで上方の文化的植民地にすぎない。「塵塚談」にいう、八文字屋本や役者評判記までも、延享・寛延のころまでは江戸町人が毎年上方からの下り本を待兼ねていた、という記述はこの事実を裏書きして余りある。読書の余裕をもつ町人、八文字屋本を愛好する江戸の町人は、その出身において、その生活感情において、まさしく上方の出身になる町人であった。

### 三

そうなれば、江戸が江戸固有の文化をもつには、江戸が都市としてある程度の完成をしめし、ひいては江戸にのみ店をかまえる大多数の江戸町人の間に、彼ら独自の文化を要求するだけの経済力がそなわらなくてはならない。ここで考えられるのは、八代吉宗の治下にあつた享保時代である。

吉宗の緊縮政治によって、上方町人の受けた打撃はきわめて大きかった。たとえば享保三年、幕府が金銀貨の質を慶長の昔にかえて、いわゆる享保新金銀の通用を令したとき、四宝銀は三十割増の交換比率であつた。このさい銀遣いの土地、上方の町人が受けた損失について、三井家の記録「正徳享保金銀吹替へ件書類」は、「銀遣の土地は四分一の身代に罷成」といい、また「兼山秘策」は、「此度金銀引替の新法被仰出候て、関東筋は金遣ひにて候故、当分さして替り申す義も無之候へ共、西国上方、さては御国なども難儀の旨沙汰有之、有馬玄蕃殿家来など、ひとと行当りつづれ申様に申候、四分一の身上に成申す同じ事に候へば、尤に存じ候」と、いずれも上方の苦悩をつたえている。さらにまた、享保四年の《相对済しの令》発布による貸借に関する新訴訟受理の停止、享保十六年・十

九年の二度にわたり、米価下落による武家の困窮を救済する目的で上方町人に課した、強制的な米の買上げは、やがては宝暦十一年、大坂町人に課した最初の御用金にまで発展している。この年、幕府は米価調節を名として、大坂町人三百五人から七十万両を借りあげた。この御用金について、津村正恭はその書「譚海」において、『大坂豪富の町人、奢侈年々甚敷に付て、宝暦十三年の秋、分限に応じ用金を命ぜられ、その外にきびしきせんさくありて種々の禁をたてられ、是より大坂衰微のはじめとなりたり』と述べている。享保以降、あいつぐ幕府の町人に対する施策が、上方町人にあたえた打撃のいかに大であったか、これらの例から容易に推察のつくことであろう。

この場合、江戸町人の受けた生活上の圧迫は、禁令のお膝元であるだけに、けっして生易しいものではなかったにしても、しかし経済上の打撃はほとんど受けなかったといつてよい。江戸町人は武家という特定の顧客をつねに確保しており、それは吉宗の緊縮政策のもとにあつても、なお一定の利益は確保しうる存在であつたからである。いな、享保新金銀通用による銀遣いの土地上方の経済界の混乱は、金遣いの土地江戸の町人にとって、上方町人の間に極めて有利な取引をすることを許した。ここに江戸根生いの町人——江戸にのみ店をもつ町人が江戸に住む《江戸店もちの上方町人》に伍してその地歩を固める余地ができたわけであつた。

しかも、この享保時代において、都市としての江戸はほぼその完成を終えた。たとえばこれを町数について見ると、延宝七年江戸町数八百八町、正徳三年九百三十三町、享保八年千二百十町、同十年千六百七十二町となり、荻生徂徠が「政談」において《江戸の広さ年々に弘まりゆき、……何の間に北は千住、南は品川まで家統に成たる也》という状態となり、寛保三年千六百七十八町をもつて、以後寛政三年まで増減をみない。町方人口についてみれば、元禄六年三十五万三千五百余人、享保三年五十三万四千六百余人、以下四十八万だい、四十七万だい、四

十五万だといと増減はみながら、享保十九年には五十三万三千余人に達し、以来幕末まで五十万だいを維持している。  
(高橋梵仙氏、日本人口史の研究) この人口の増加は、享保年中に頻発した百姓一揆にせめられる農村の疲弊が、流民や出稼ぎ人を江戸に流れこませた結果だとしても、幕末にいたるまでほとんど変化をみせない人口の固定化は、享保期において、江戸が後年の文化を担当する都市としての成長をしめたことを物語るものとして充分である。

こうして、江戸がともかく大都市としての性格をそなえ、政治都市江戸の町人ゆえに、享保の緊縮政治のもとにおいてすら、江戸の町人がなお成長をつづけたことは、江戸にのみ店をかまえている町人の間においても、すでに開幕以来一世紀以上におよぶのであるから、おのずからそこに文化をうむにたる富の蓄積が行なわれてきたことをしめす。そうした江戸町人の代表者が、享保九年に株組織を公許された札差であった。札差の取扱う米およそ三十七万石、金に換算して三十七万両余は、掛屋より売出す米の四分の一内外にすぎない。したがって彼らの富といえども、延宝・天和のころから上方の町人文化をリードした蔵元・掛屋のそれに比較すべくもない。しかし、札差が二万人におよぶ旗本御家人の唯一の金融機関として旗本御家人の死命を制したことは、おのずから彼らに江戸の町人として、武家に対応しうるだけの誇りをもたらしめるにいたった。さらに、彼らの富が上方町人のそれに比較すべくもなかったとはいえ、経済社会においては一地方都市にすぎない江戸において、札差の富がたとえば大目平十郎が、自家の小判に極印を打ったものが、平十郎小判の名のもとに、江戸町人の間にもはやされたという事実のごとき、明らかに江戸における《江戸店もちの上方町人》の江戸の経済界における支配権を排除し、江戸町人の江戸における経済的基盤を確立しえたことであつた。こうして、江戸の町人文化は札差の富によってリードされていった。洒落本「十八大通百手枕」一部の存在のみでも、札差が新しい江戸文化をリードしていったことを如実に

物語る。

この結果が、享保の緊縮政治のもとにおいてすら、江戸に河東節の流行を見、豊後節の盛行となり、それより派生した江戸浄るり、常盤津・富本・富士松・新内等、いずれも元文より宝暦にかけて独立、流行に赴いたものであり、あるいはまた後に江戸庶民文化の一面を代表する浮世絵においても、享保のなかばにすでに色摺板画の発生をみるにいたるのである。

#### 四

学問の中心地が京都から幕府の所在地たる江戸に移行することは、家康が治政の要道を儒教にもとめた開幕当初において、すでに決定されていたといつてよいのであるが、実際に学問の中心地が伝統の京都をはなれて江戸に移行する形勢をみせたのは、儒狂の名でよばれた五代綱吉のころ、元禄年間からである。天和二年、木下順庵が幕府に召されたのをはじめとして、新井白石、室鳩巢と、あいついで一諸侯の儒官が幕府に採用され、荻生徂徠が古文辞の学を唱えるにいたって護國の学が一世を風靡した享保期にいたり、儒学の中心地はまったく江戸へ移行してしまった。国学においてすら、この時期において荷田春満・荷田在満・賀茂真淵といった一流の国学者の江戸居住をみ、あるいはまた当時の自然科学、本草学においても、阿部将翁・稻生若水といった、近世の本草学に飛躍的發展をもたらした一流の学者の、江戸を舞台とする活躍となってきた。この江戸における学問隆盛の風潮に刺戟されて、笈を負うて江戸に遊学した学生のいかに多かったか。想像するまでもない。しかも將軍吉宗のもとめた学問がけっきよは幕府に奉仕する実学であったことは、これら江戸に氾濫した学者、なかんずく修学の目的を治国平

天下におく漢学者の群をして、仕官に望みをかける余地ならしめた。おのずからここに、その不満をいやすために、倫理修徳をいわず、詩文にはしる多くの儒生があらわれるにいたった。しかもそれは、徂徠歿後、讓園学派の對象とした二方面、経学と、詩文・歴史の研究との分裂によって拍車をかけられた。江戸よりかはやく、政権の所在地にほど遠く、伊藤東涯の歿後は、寡聞固陋、亮講御俗を事とし、赤松滄州をして《乃ち名下果して虚士なしと称するに足る者、唯岡千里一人》（先哲叢談）といわしめた京儒者のなかに、風流文事の世界に遊ぶものがみられ、彼らの筆になる洒落本が上方に発生していた。おなじく徂徠歿後、南郭が芙蓉館に唐詩選を講ずるに及びまた江戸に洒落本を発生せしめたのである。いわゆる江戸洒落本の祖「異素六帖」（宝暦七年）が、儒学者沢田東江の作であり、唐詩選と百人一首をもつて滑稽のなかに遊里の穴をうがったその内容は、服部南郭がはじめて註釈をほどこし、テキストとして門人に教え、寛保六年、宝暦三年と、あいついで書肆嵩山房から小本型式で出版せしめたことを原因とする、当時の唐詩選の流行にあてこんだものであった。倫理修徳をすてて風流文事の世界に遊んだ儒学者の群とおなじく、東江もまた幕府の御用学者林鳳岡に学びながら、遊里に遊んで柳橋美少年の名でよばれた。その体験の所産こそ、洒落本「異素六帖」であった。江戸における洒落本もまた、漢学者の余技として出発した。それにしても、その数においてはるかに江戸を圧倒した上方の発生期洒落本が、明和以後なにゆえに順調な発展をしめしえなかったか。ふたたび上方町人に視点をあわせよう。

## 五

元祿以降、商業経済の行詰りと幕府の相つぐ町人階級に対する圧迫によって、上方町人はしだいに保守的になっ

ていった。これを町人社会の現実についてみるならば、上方の大町人はすべてじしん商売にたずさわらず、實際の仕事はすべて手代がこれにあたっていた。享保に入つて、江島其積が筆をとることによってわずかにその命脈を保つた、浮世草子の町人物についてみれば、それらはすべて手代が作品の主人公であった。いうまでもなくこれは、固定化した上方町人社会の忠実な反映にはかならない。上方の大町人は、完全に町人貴族になりおせたのである。そうした大町人は、金と閑のあるにまかせて、あるいは風流を嗜み、あるいは學問を愛好した。混頓詩社における、また懷徳堂における町人學者の輩出となるわけである。けれども、彼らが懷徳堂において倫理道德を口にし、混頓詩社において風流文事に遊んだとしても、所詮は生活に不足のない大町人の趣味以上のものではない。仕官の望みを失つて風流文事の世界にはしつた、漢學者の悲しみや憤りを理解するにははるかに遠い存在であつた。所詮、彼らは漢學者の余技になる洒落本をうけつぎ、独立のジャンルとして發展せしめうる存在ではなかつた。いな、上方の町人社会は、すでに浮世草子の衰頹をそのまま見捨てていたのだ。独立した町人でなく、手代の階級となれば、これはもう固定化した上方町人社会にあつて、主家の家業を代行し、やがては暖簾を分けてもらつて独立することを唯一の望みとする存在であつた。洒落本にかぎらず、文學一般に關心をよせようはずもない。近世後期における上方町人社会において、大町人を代表する文人が、文學・博物學・繪画・書道のすべてを身につけ、しかもついに二流の人にすぎなかつた偉大なる好事家、木村兼霞堂であり、手代の階級から生れた代表的學者が經濟學者山片蟠桃・草間伊助らであるという事實ほど、享保以降の上方町人文化の性格をたんに象徴しているものはない。



上方町人たちがって、江戸の町人は政治都市江戸の住民であるがゆえに、余技として遊里小説酒落本を創作した漢学者の心情に、あいかよう悲しみと憤りをつねに抱いていた。上方においては、所司代や二条城・大坂城の勤番の武士、蔵元の留守居役と、上方の町人社会に顔をだす武家階級は、上方町人にとっては敬して選ざなければならない影響力ももたない武士であるか、もしくは上方の町人に心ならずも頭をさげる存在であったが、江戸の町人は一年を通じてちよくせつ武士と顔をつきあわせ、四民の最下位として、屈辱に耐えながら生きてゆかなければならない。こうした江戸町人の、不平と批評意識にみちた生活感情が、正徳以降特におびたしい、あの痛烈な落首や小咄を生んだのである。それにしても落首や小咄は、それがいかに痛烈な諷刺や皮肉をふくもうとも、やはり江戸町人の武家に対する劣等意識の産物である。酒落本が江戸町人の美的生活理念たる通を描かんと欲して、野暮と新五左を登場せしめ、逆説的・暴露的な構成をとるゆえんであった。

それでは、「異素六帖」によって酒落本が江戸町人の手に移行することをすでに暗示する、漢文体にかわる和文脈による会話表現を見、「遊子方言」にいたってみごとな会話文体を確立した酒落本作家の表現技術は、何によってもたらされたものか。それはちよくせつには絵入狂言本からであったと思われるが、しかもなお、齒ぎれのよい江戸詞による、生き生きとした会話描写は、江戸における咄本の文体との関係を見逃すことはできない。

江戸における初期の咄本は、上方の咄本とおなじく、会話文体のみをもって構成されず、叙述をとまなつて、結末はいずれもその語尾に《………といはれた》とつけていた。近世におけるもっとも早い咄本の一つである「昨日は今日の物語」以来の《といふものじやと申された》、もしくは、《いはれた》の語法を襲用したものである。しかし、この上方における軽口の冗漫の結尾は、江戸の咄本においては、正徳二年の「新話笑眉」以来急速に止揚され

て、冗長を排して結末を会話とめるスタイルに移行し、上方の咄本からの影響を除去して、明和九年刊の「話稿鹿の子餅」にいたって小本形式の咄本として、簡潔にしてよく人の肺腑をつくところの江戸小咄に展開していく。

（「鹿の子餅」の作者木室卯雲は幕臣。この作のなるちよくせつの機縁は、明和五年刊の懷憶主人による「笑府」の翻訳、遠くは寛延四年の岡白駒による「開口新語」の翻訳にある。小咄においてもまた、支那俗文学の影響があった。）

洒落本が会話文体をもっぱら表現の方法として採用したことは、それが《通》なる江戸町人の美的生活理念を描かんとして、しかも現象描写としての類型的な風俗を描くに止まった必然的な結果であった。いかなる咄しにせよ、常識を一步はずれた人物を登場せしめ、それに伴う笑いを狙った宝永以降の咄本が、しょせんは咄本の性質上、そこに登場する人物が類型に止まらざるをえなかったがゆえに、ほとんど会話のみによる表現によって一篇の笑話の構成が可能であったのである。「新話笑眉」以来、生き生きとした江戸詞による会話文体の表現をとっていた江戸の咄本が、ちよくせつに江戸洒落本の祖「遊子方言」のみごとな会話文体の先蹤をなしたことは疑いをいれない。咄本もまた、享保より宝暦にいたる間において、後の江戸小咄に展開する準備期間を終えていたのである。

いままで多く洒落本の発生の基盤に焦点をあわしてきた。しかも、江戸における町人文学のさががけは、ただに洒落本にかぎらない。なお化政期の笑いを目的とした中本、滑稽本につながるものとしての、発生期滑稽本、いわゆる談義本がある。当然わたしは、次に談義本について語るべきである。

## 七

発生期滑稽本の名のもとに、滑稽本のジャンルに概括せしめうる談義本は、享保のころから大衆の日常生活を指

導教化するためにおこった、石門心学の社会教化運動に呼応して江戸に発生したものである。それは窮極において、吉宗の緊縮政治・武断政治への民衆の順応をめざした教化の文学であり、宝暦二年の「当世下手談義」を最初として、宝暦年間にあいついで刊行されている。しかもこの談義本が、それぞれ江戸町人に迎えられたということは、やはりそれだけの理由があった。江戸町人の間における、心学の普及がそれであった。

心学は、とかく利を追うゆえに賤しとされた町人の商行為を、《商人の売買するは天下の相け也。細工人に作料を給ふは工の録なり。農人に作間を下さることは、是も士の録に同じ。天下万民産業なくして何を以て立つべきや》として、武士の録を食むと同じと見、また、この時代の多くの儒者によって否定された町人の存在を、《士は元来位ある臣なり。農人は草莽の臣なり。商工は市井の臣なり》として、積極的に町人の存在を肯定し、しかも町人・百姓が《君をたすくる臣の道》（以上引用は「都鄙問答」）を、儒・仏・老の教義を借りて、これを卑近な日常の行為に求めて説いた。封建制の建直しに狂奔する吉宗の武断政治のもとにあって、ともすればみずからの存在を見失いがちであった庶民、なかんずく町人にとって、こうした心学は、なによりも強い精神的支柱であった。それにしても、かかる心学による庶民教化運動に呼応して出発した談義本の作者が、その職業上庶民教育に熱意をしめさざるをえなかった洛陽沙弥静観坊好阿であり、また封建社会にもっともよく順応せしめられた学問好きの裕福な自作農、伊藤単朴らであったことに不思議はないとしても、なお江戸における洒落本発生の大任を果たした沢田東江が、談義本の名ではよべないまでも、おなじく教訓的滑稽本「迷処邪正案内」（宝暦六年）を著作していることをなんとみるべきであろうか。ふたたびこの時代における儒学者に眼をむけなくてはならぬ。

## 八

近世における老莊学は、徂徠が古文辭の学を唱道して諸子の研究をすすめた結果として、享保年中より急激に盛になってきた。まず我国人の手になる最初の老子の註釈書として、徂徠の弟子大宰春臺の「老子特解」があらわれ、ついで渡辺蒙庵・片山兼山らもあいついで老子・莊子の註釈書をあらわすにいたるのである。こうした儒者による老莊学の研究とならんで、一方においてはおなじく儒学者の手によって老子・莊子の意を仮名に和らげた一連の戯作が、享保から宝暦にかけてあいついで版行された。享保十二年刊の「田舎莊子」「田舎莊子外篇」（佚斎樗山作）寛保三年稿・宝暦三年刊の「老子形氣」（新井白蛾作）寛保三年刊の「面影莊子」（宜山田長与作）宝暦二年刊の「都老子」（名張湖鏡作）「都莊子」（信更生作）等がそれである。これら儒者の老子・莊子に対する見解は、「田舎莊子外篇」の序文（幾十年かへて。林希逸といふもの出て。其書を解こと。乱髪をくしけずるがごとし）をひくまでもなく、近世初頭において林羅山が宋の林希逸のあらわした「老子口義」に倭註をほどこして出版した「林註老子」以来、我国の老莊学を支配した林希逸の老子・莊子に対する解釈にしたがっている。林希逸は老儒の思想的な一致を説いていた。これらの儒者が老子の意を仮名に和らげた教訓的戯作に筆をとったとしても、あえてふしぎではない。それにしても、林希逸は老儒の一致は説いても、老莊はこれを分離して、莊はむしろ仏と一致するものと説いていた。莊・仏ともに、それはあきらかに封建秩序に相反する思想をふくんでいた。しかも莊子の意を仮名に和らげた教訓的戯作に彼らが筆を染めたことは、「田舎莊子」の作者がおなじく自著「六道士会録」（享保十四年刊）に、「仏語はおほく人の知る事有て耳に入やすし予は其至情に感ずる者なり法を信するにはあらず」と

いって、地獄めぐりにかるうじて戯作の態勢をしめしているように、俗耳にいらしめるための便法として、莊子の寓言、を借りたにすぎない。さればこそこれらの書は、「面影莊子」叙にいうごとく、《仁義の教と清虚の教とを別臚ず浪に孔孟莊列の異味を和鑾と》し、《仁義の厨冊にも老莊虚無の風味を和鑾とし、莊列虚無の臚部にも仁義の滋味を味ひし》らしめようとする教化の態度をとっているのである。その年十六歳の新井白蛾にして、その著「老子形氣」に、《今の儒者達の国を治ての天下を平にしてのと青表紙に向て勿体らしき顔付にてチンファンカンを咽と取も直さず松島茂平次の後醍醐天皇に成た芝居狂言見るにひとし》といい、さらにまた《時の大君は時の聖人京三条大橋江戸日本橋大坂高麗橋其外国々在々迄示し置るる御法度は不易の大法泰平の御恩沢あの通り学びて行く一生万事目出度といふものなり》というように、これら儒学者による教訓的戯作は享保の緊縮政治を背景として、民衆の教化をめざしたものであった。さればこそそれは、心学の教化態度と、目的意識の強弱こそあれまったく同一だったのである。

ここにいたれば、儒者沢田東江に「迷処邪正案内」の作のあることはなにもふしぎではない。ひとたびは儒学者らしく「迷処邪正案内」に庶民教化をめざしながら、いまだ年若い彼はたちまち当代漢学界の風潮に染まって「異素六帖」を発表する。東江が町儒者であったことを割引いてもなお、武断政治の余波いまだ失せないときにおいて、我が身进行处理しかねる知識人の悲しむべき姿と見てよい。「異素六帖」に展開される色道論が、儒者・仏者・歌学者によってなされているのは、東江の心情を伝えて暗示的ではないか。宝暦期の多くの教訓的滑稽本の作者のなかに、ひとり沢田東江にかぎらず、なおいくたりかの漢学書生があつたとしても、必ずしも性急な推論ではない。

## 九

こうして江戸町人文学のさががけをなす宝暦期の教訓的滑稽本、洒落本の発生は、享保の治下における江戸の町人社会の実態を知ることによって理解され、それはいずれにおいても漢学者の手を通じて生れてきたことを説いてきたわけであるが、明和・安永のころとなれば、教訓的滑稽本——談義本はしだいに町人文学の主流よりはずれ、洒落本のみ隆盛の一端をたどってゆく。いうまでもなく、吉宗の緊縮政策が明和・安永期には老中田沼氏の自由主義的施策によってくずれさり、教訓を必要とする時代でなくなったことと、さらには教訓とならんで談義本をささえていた笑いは、洒落本のなかに政治都市江戸の町人に訴える、より強烈な笑いが存在していたからにはかならない。それにしても、明和・安永期といえ、札差の豪奢は、遊里の遊興に代表されて江戸町人の喝采をはくしていた時代であり、時代の風俗は、この札差の一挙手一投足によってリードされていたにもかかわらず、洒落本作者は山東京伝いずるまではほとんど武家であるのは、いかなる理由によるものであるか。町人階級じしんがみずからの表現能力をもつにいたるには、まだ時代が早かったといえ、それまでである。宝暦から明和・安永のころにかけて、江戸町人のなかで、文芸に筆をそめうるだけの能力をもつ階層はどのような町人であったかを考えよう。

江戸開府と同時に、幕府は町割りを決めて移住者の町人にそれぞれ土地をわかちあたえた。しかし町人階級のなかにおける生存競争の敗者は、しだいに自分たちの有する土地を手放し、また江戸の都市としての膨張に伴う新移住者の増加につれて、いつしか特定の家業をもたず、貸地・貸家の利によって生活するいわゆる仕舞多屋と、借地・借屋に居住する町人——公にはそれは町人とはよばないのであるが——との区別ができてきた。享保期になれ

ば、大都市における町家の七割は借家といわれているが、（小野氏「近世都市の発達」岩波講座）江戸もこの例にもれるものではなかったろう。とすれば、文芸作品に関心をよせる余裕をもつ町人は、札差とこの仕舞多屋——家主階級であつたはずである。しかも、札差はみずからの経済力を風俗面に誇示するに止まらば、彼らの代弁者を彼らの階級のなかから文学の世界に送りえなかつた。わずか百人にたらない彼らの仲間の数と、彼らの教養が、かつての上方町人のそれのごとく、やむにやまれない情熱をもつてかちとられたものでなく、享保の治を通じて受動的にもたらされたものであつたためであらうか。文芸の世界における札差の寄与は、わずかに俳諧の世界において趣味的な「四時観」に見られるのみである。一方、家主階級といえ、これはすでに町人として一定の職業をもつ気魄を放棄した人々である。彼らは、その時間と金の余裕をもつて、学問への関心はしめたかもしれない。しかし、この時代における学問とは、封建制度をささえる儒学である。享保年中、吉宗の設置した目安箱へ改革意見を投書したものに、処士と家主をもっとも多く数えうることをしるならば、彼らに文芸作品を生むだけの情熱があろうはずがない。それは学問への情熱をももちえなかつた。大坂の富裕な町人が懷徳堂を《我黨の学問所》として維持しつづけたのに比し、享保六年、おなじく幕許により、處士菅野彦兵衛が江戸深川に創立した會輔堂は、江戸の町人の支持を受けるにいたらず、何ら見るべきものなく終焉してしまつてゐる。

近世後期町人文学といつても、それはなおしばらくの間、旗本や御家人、諸侯の留守居役といった、有閑知識層の武家の手に依存せざるをえなかつた。おなじく武士恣川春町が、「金々先生栄花夢」に、利那的な享樂思想を現実の風俗を通じて描くことによつて、大人の文学となりえた草雙紙の黄表紙が、洒落本とならんで寛政の改革までは江戸町人文学の主流となり、その黄表紙にのみ、やや多くの町人作家をみるゆえんである。

近世後期町人文学——江戸文学の性格が、上方文学のそれといちじるしく相違することについては、封建社会の変遷と両都の町人の性格の相違にもとづくことは、すでに先人によって説かれ、常識化しているところである。私は私なりの方法でこの事実を実証してみようところみただけであるが、その結果は、享保期にいたって江戸が都市としてのいちおうの成長を終え、上方町人の支配を脱した江戸町人がこの時代にその地位を確立し、彼らが浪人学者による教訓的戯作、遊戯的創作を母胎として、新しい江戸町人文学を誕生せしめたことをしめして終った。ふりかえてここに確認しうることは、近世後期の町人文学が、享保の武断政治、緊縮政治の落し子として誕生したものであり、それゆえにそれは、人生に対する誠実な懷疑など抱きうるはずもなく、不合理な封建道徳になんらの疑問ももたず、洒落といい、通といい、いきといい、いずれも思想性をまったく缺いた美学を軸として展開してゆく性質のものであることが、発生の当初から約束されていたという事実である。

—昭和二十七年十一月、日本近世文学会研究発表会において発表、二十八年五月改稿。—